

「会社を“塾”に、社長が“塾長”に」

田坂広志先生が『企業こそ人間成長の学舎(まなびや)であれ』と語っておられますが、まさに“我が意を得たり”と、膝を打ちました。

真の人間成長は、ただひとつ、仕事を通じてこそ、磨き続けられるもの。

田坂先生は、次のように、社員に伝えるべき人間成長の心得を問いかけておられます。

いま、経営者は、若手社員に何を語るべきか。

いま、管理職は、若手社員に何を教えるべきか。

そして、いま、若手社員は、会社で何を学ぶべきか。

私たちは、人生という限られた時間の大半を、仕事に使います。

この仕事が歓喜に満ち、感動と、感激と、生き甲斐に溢れたものであれば、人生は大成功と呼べるでしょう。

残念ながら、現実の企業の大半は、人間成長の場ではなく、給料を稼ぐだけの場になり、悪くすると苦痛と悲惨と、いがみ合いの場になっている企業まであります。

どこが、何が、誰が、何時から、このような差になったのでしょうか。

元経団連会長の土光敏夫氏が、「仕事の報酬は仕事である」と、仕事に対する叡智ともいえる言葉を発しておられます。

また、森信三氏は「職業とは、人間各自がその『生』を支えると共に、さらにこの地上に生を享けたことの意義を実現するために不可避の道である。されば職業即天職観に、人々はずっと徹すべきであらう」と、教えて下さっています。

中小企業の我々は、今こそ、日本人が元来持っている、仕事観・道徳観・使命観を取り戻す秋です。

職人は、職人としての使命を、幹部は幹部の、社長は社長としての役割を果たし、よりよい日本は、我々、中小企業が、担っているという矜持を取り戻しましょう。

元号が『令和』になりました。大きく変えるべき事の 하나가、表題の「会社を“塾”に社長が“塾長”に」という、我が社を、人間成長の学舎にすることだと信じます。

社長、私ども、中央総研は、創業以来三十余年「人間学」について、学び、実践して参りました。ようやく、時代が我々に追いついてきたと自負しています。

この機会に、是非、開塾して下さい。私共が、全力で支援させていただきます。



今月のポイント

仕事を通じて人間を創る